

乳幼児と大人におけるディスコミュニケーションの分析 —身体・非言語要素に着目して—

可知 ゆかり

人々がお互いのことを知るためにコミュニケーションはなくてはならないものであり、私たちは日常生活を送る中で自然とそれを行なっている。コミュニケーションは言葉を用いたものと用いないものの2種類があり、私たちは通常その両方を使って他者と交わる。一方、乳幼児はまだ言葉を用いず、その感情自体が未発達で大人とは異なるために、大人にとっては乳幼児の心理状態を理解することは難しい。本研究ではディスコミュニケーションに着目することによって、従来とは違った視点から乳幼児のコミュニケーションの諸特性を明らかにし、よりよいコミュニケーションを行なっていくために必要な要素は何であるかを研究することを目的とする。

本研究では乳幼児と大人のコミュニケーションの実態を日常に近い形でありのままに見ていく必要がある。そのため、調査対象者が用いる言葉や様子を詳細に観察し、対象者が感じたり考えたりしていることを具体的に探ることのできる質的調査法を用いた。その中でも調査対象者により密着した調査を行なうために、参与観察法、映像分析法、インタビュー調査法といった3つの方法を用いて調査を進めた。本研究の調査対象者は『乳幼児』と『乳幼児に関わる大人』であり、乳幼児と養育者、調査者自身、調査時に関わった人々が含まれる。対象者と親密なラポールを築く必要があるため、調査対象は一組の親子（子は生後1年未満の乳児）に絞った。

今回の調査対象者である親子は母子として濃密な関係にあり、これが調査結果に色濃く特徴として表れていた。この調査により、乳幼児と大人のディスコミュニケーションとして大きく分けて4種類のことが観察できた：①乳幼児と養育者の間で起こるどちらの都合を優先するのかという問題、②乳幼児の訴えと社会的状況に板挟みにされる養育者の実態、③養育者とそれ以外の大人に対する乳幼児の反応の違い、④母子が密接につながるために起こる社会からの分離、である。そのようなコミュニケーションの実態から、一般の養育者全体に関わる問題点も見えてきた。

これらの調査結果をもとに考察を行なった。乳幼児は自身の状態を視線や表情、体勢といった非言語要素によって表しており、さらに言えば『笑う』『泣く』といった行動の中にもいくつかのバリエーションが存在した。そこに言葉はなくとも、乳幼児は全身を使って自身のことを表現しているのだ。今回調査した養育者のように、過去の経験や生活リズムなどをもとにすることで、より正確な乳幼児の状態を探ることもできるだろう。乳幼児のことを知るには相手に対する慣れや経験が不可欠であるが、何よりも乳幼児のことを『解ろう』という気持ちが大切なのではないかと私は考える。

(指導教員 武者小路澄子)